

# 挨拶

---



後藤 明

(南山大学人文学部・教授／人類学研究所・第二種研究所員)

皆さん、こんにちは。南山大学人類学研究所設立70周年関連のシンポジウムにお越しくださいまして、ありがとうございます。本来なら研究所長の渡部先生のほうがいいのですが、7月には私が話すことになっていましたので、その流れで、前所長としてご挨拶させていただきます。

人類学研究所は1949年、70年前に基礎が置かれました。南山大学はカトリック系の大学ですが、ドイツに神言会というカトリックの教団があり、その神父たちが、俗に「独逸学派(ドイツ・オーストリア学派)」という、民族学の歴史に残るような一大学派を戦前につくっていたわけです。今はボンの近くにありますが、その流れで、日本にも研究所をつくるということで、人類学研究所は1949年に設立されました。

当時は人類学研究所と人類学博物館は1つの同じ組織として、しばらく活動していました。当初は考古学の方もたくさんいらっしゃって、発掘なんか盛んにおこなっておりました。例えば、愛知県の吉胡貝塚ですが、日本の考古学史上、歴史に残るような、とても重要な貝塚の発掘も研究所が中心になっておこなっていたようです。

やがて、1979年、今から40年前に一つの転機が訪れます。そのときに研究所と博物館が別組織になって、今日まで来ています。その後、人類学研究所は、どちらかという宗教人類学の研究が中心になっていって、考古学や物質文化の研究はあまり盛んではなくなったように見えます。

しばらくそれでやってきたのですが、いろいろ経緯があって、2009年に私が所長に就任しました。私はもともと考古学の出身で物質文化などの研究をしていますから、これはもったいないという気持ちをもちました。また、再び人類学研究所と人類学博物館の連携を強めたいという気持ちをもちました。

今、研究所には、考古学や物質文化を研究している所員も何人かおられます。「せっかく同じ大学に研究所と博物館があるのだから、連携していこう」ということになっているのが現状かと思えます。それで、もともと1つの組織だった人類学研究所も博物館も70周年を迎えるということで、共催して今日のシンポジウムに至りました。

日本では、実は「人類学」という名前を冠した博物館や研究所というのはほとんどないですし、南山の組織が日本では一番古いと思います。このように研究所、博物館はともに大変貴重な存在でもありますので、今後、両組織が連携して研究を進めていく上で、指針になるようなシンポジウムになればと思います。後で質問票なども集めるようですから、皆さんも積極的に質問などをお寄せいただいて、実りあるシンポジウムにできればいいなと思っております。では、

今日はどうもありがとうございます。